

## 1001のコーヒーショップがある町 地理学

インドネシアのスマトラ島北端に位置するバンダアチェは、こう呼ばれています。なぜ1001なのかは忘れてしまいましたが、とにかくコーヒーショップがたくさんあります。町中を見回してざっと勘定してみても、もしかしたら優に5000軒はあるのではないかと思います。

今から20年近く前の2004年12月26日に、史上最悪と言われた津波災害がここで起こり、当時の人口の4分の1に当たる7万人ほどが亡くなりました。名古屋大学の調査団の一員として、わたしがこの町を最初に訪れたのは、それから8か月後のことです。その後、パンデミックが起これるまで、平均すると毎年2・3回ここに足を運び、災害復興のようすを観察してきました。

地震や津波は自然現象です。しかし、地理学では、災害が起こるのは自然の力だけではなく、危ない場所に住んでいるとか、津波に関する知識がないとか、人間のほうにも原因があると考えます。そういう状態は、貧困や不平等といった社会の構造と密接にかかわりますが、約30年間続いた武力紛争が津波後に終結したように、災害をきっかけに地元の社会が変わることもあります。

バンダアチェの政治は、コーヒーショップで決められると言われてきました。伝統的には、そこは圧倒的に男の世界でした。津波から10年近くが経った頃から、おしゃれな店がどんどん増え、若い女性のグループを目にすることも多くなりました。女性の社会参加が進んだのか、政治を決める場所が変わったのか、街角の風景の中に、社会の変化を考えるヒントがあります。わたしたちが現地調査を続けているのは、このような理由からです。

高橋誠 教授

バンダアチェの老舗コーヒーショップ（2012年7月10日、高橋撮影）。



## 眠るトラ 美学美術史学

あけましておめでとうございます。2022年は寅年ですね。トラと言えばライオンと並んで、勇猛果敢な猛獣の代表格です。日本東洋の古美術では、龍とあわせて、「龍虎図」という形で描かれてきました。ですが、今回はそんな勇ましい虎のイメージとは異なる、穏やかに眠る虎の絵画を紹介しましょう。

図版に掲げたのは「四睡図（しすいず）」という作品です（掲載は部分、東京国立博物館蔵）。豊干禅師（ぶかんぜんじ）と虎、寒山拾得（かんざんじつとく）の三人と一匹が体を寄せ合って眠る図です。豊干は唐の僧で、虎に乗って寺の門をくぐるなど、奇矯な行動で知られた人です。寒山と拾得もまた奇人であり、豊干だけが二人の言葉を理解したので、寒山拾得は豊干になつていました。常識にとらわれない彼らの生き方は禅宗において好まれ、よく描かれました。

「四睡図」の元になったエピソードは分かりませんが、四人が一かたまりになって静かに眠る姿は、差別（しゃべつ）の無意味なことを示すとされます。豊干禅師は出家した僧侶、寒山拾得は在俗の人、虎は動物とそれぞれ立場は異なりますが、それは現象界での仮の違いに過ぎず、一かたまりで眠ってしまえばそうした外面的な差異は無くなるということです。その上、眠りは、生と死の境に立つことで存在すること自体を曖昧なものと化してもゆきます。

この作品では、そのような諸存在が本来備える無差別性を表現するために、細い線でレース編みのように描く白描という技法を採用しています。極細の線で描かれた人物や事物は存在するかしないかのそけき曖昧な状態を示し、均一の細線で描くことで、諸存在が無差別かつ齊一であることを視覚的に示してもいます。

伊藤大輔 教授

平石如砥他賛「四睡図」（部分・東京国立博物館）元時代

著作権保護のため、  
画像はWEB非掲載とさせていただきます

## ことばについて勉強するとは 言語学

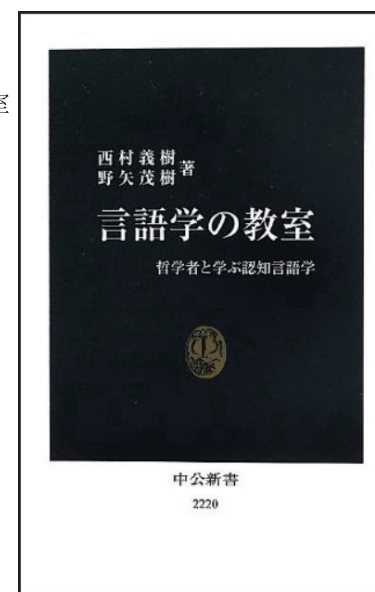
「言葉について勉強して何の役に立つの?」という質問をよく投げかけられる。私にはこれに対する自分なりの答えがある。それは、言葉を見つめ直すことが出来るという事である。言葉は、身近な存在であるが故に無頓着になりがちなものである。言語学を勉強すると、言葉というものがいかに不思議で興味深いものであるかという事を痛感する。専門科目を受講していると、我々に馴染みのある言葉から、初めて聞くような名前前の言葉の現象について知ることが出来る。日本語や英語に無いような現象について触れることは少なくない(例えば、アラビア語に見られる咽頭化という現象)。また、日本語や英語についても、言われてみれば不思議な現象に出会う(例えば、なぜ動詞に不規則変化があるのか)。そのような現象について日々考えていく時間は実に貴重なものである。

このようなことを叶える上で、名大の言語学研究室は非常に恵まれている。各分野の第一線で研究をしている7名の教員がいて、その数は全国的に見ても多い。そして、言語学の専門の授業は少人数で行われ、疑問点があれば気軽に尋ねることが可能である。また、リテラボには数多くの専門書があり、自由に閲覧できる。このような恵まれた環境は決して当たり前のことではない。

最後に、言語学の授業は、面白いが楽ではない。大学院生と合同の授業もあり、レベルは高い。しかし、やる気があればいくらか高いレベルの勉強をすることが出来る。それは皆さんの血となり肉となり、一生の財産となる。言葉について皆さんと議論ができる日が来ることを心の底から望む。

福田悠太 学士課程3年

言葉の面白さ、不思議さを感じるきっかけをくれた本です。  
西村義樹・野矢茂樹(2013)『言語学の教室  
哲学者と学ぶ認知言語学』中公新書



# 月刊 名大文学部 第125号

隔月刊行



編集発行：  
名古屋大学文学部広報体制委員会  
koho@hum.nagoya-u.ac.jp  
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。